人魚姫の王子

おりのめぐむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚姫の王子

【Ｎコード】
Ｎ３８９２ＢＡ

【作者名】
おりのめぐむ

【あらすじ】
俺、橘川弘樹は高三の進級のために補講で春休みに学校へ。
そこで偶然、優等生の森谷知夏と出会う。
憂鬱だった日々が知夏と出会ってから変化した。
周囲の反対を背に二人で旅立った時、起こってしまった事故。
――だけど、俺に何が出来る？
人魚姫のようになってしまったお前に、俺は…？

プロローグ

幼い頃の思い出。
確か5、6歳の頃だと思う。
死んだ母親からよく『人魚姫』の童話を読み聞かされていた。
童話を読んでもらう度に不思議に思うことがあった。
そんなある日、何故だか急に母親に聞いてみたくなった。

「あのね、どうして人魚姫は人魚に戻らなかったの？」

『…それはねぇ、人魚姫は王子様を好きだったらなの…』

「どうして王子様は人魚姫と結婚できなかったの？」

『人魚姫はお話が出来なかったから本当のことが言えなかったの』

「じゃあ、どうして人魚姫は海の泡になったの？」

『人魚姫は自分が死んでもいいくらい王子様が好きだったのね』

「死んでもいいくらい…？」

『そう、自分が死んでもいいくらい、にね…』

そして母親はフッ…と意味ありげに微笑んでいた。
父親に”隣の国のお姫様”がいたのを知っていたかように。
…それから急に病気で死んで逝った。

王子のために人間になり、王子のために死を選ぶ。

人魚は自らを犠牲にして愛を貫いたという童話。
そんな自ら死を選んだ愛し方なんて本当にあるのか？

———俺はそんな愛なんて知らない。
そう思っていた、ついこの間までは。

見せかけの継母

高校2年最後の終業式。
明日から春休みってやつでクラスの連中が浮かれ気分になってる頃。
俺、橘川（たちかわ）　弘樹（ひろき）はムシャクシャしていた。

…朝からアイツと顔を合わせたからだ。
いつもならかち合う事が無いのに今日は違った。
どうやら2日前に学校から呼び出しをくらったことを言いたかったらしい。

「弘樹くん、こんなこと言いたくないんだけどしっかりしてくれないと困るのよね…。ほらぁ、一応、お父さんからあなたのことを任されてるじゃない？　まあ、アタシだって仕事があるし。あまり時間が取れないけど、何かあるなら言ってよね…」

ため息交じりにアイツが母親面。
明らかに迷惑といった口調で上っ面だけとありあり。

「でもホントの母親じゃないし。…打ち解けないのも分かるけど学校から呼び出しはやめてほしいのよね。…でなきゃ今度はお父さんを呼ぶんだって」

赤く塗られた唇からブツブツと呟く。

「いい学校に通ってるんだからこれ以上問題を起こさないでね。両親が呼び出されるなんて恥ずかしくて…」

短い髪をかき上げながら俺と目を合わさずに自分の身支度を整える。

アイツは父親の3度目の女だ。
父親の子会社で女社長をやってるキャリアウーマン気取り。
厚化粧で派手な格好をし、母親面もしてやがる。
普段からほとんど顔を合わせることがないのにこうやって待ち構えられるとうっとおしくて腹が立つ。
言いたいことだけ言ってアイツはさっさと仕事へと出かけた。
呼び出しの原因は俺が進級できるかといった問題だ。
私立ってことで多額の寄付と春休み返上で学校に登校することでそれは解決した。
結局、高1の時と同じ。
ただ違うのは高3は大事な時期と位置づけし、アイツを呼び出したことだった。

とにかく朝からアイツとかち合い、春休みは無し。
浮かれ気分の奴らが帰った後も一人居残り補講。
———そんなこんなでムシャクシャしていたのだ。
どうにかして憂さを晴らしたかった…。
俺の心情はただこれだけだった。

偶然からなる救出

「橘川、今日はもう帰っていいぞ。また明日な」

教室で課題をやらされていた俺に担任が声を掛ける。
ガランとした教室に夕日が差し込み、時刻はすっかり夕方。
さっさと教室を出、下駄箱へ向かった。
外からはまだ運動部の声が響いている。
部活をやってる奴らには終業式や春休みなんて関係ないようだ。

「よくやるぜ、全く」

クソ真面目に練習している姿を横目にペッとつばを吐きかけた。

「あ〜あ、かったり〜」

ますます腹立だしさが蓄積される。
学校を離れ、ただこのまま真っ直ぐ家に帰る気にもならないし、寄り道することにした。
どうせ家に帰っても誰も居やしないし、関係ない。
ゲーセンでも行ってボコってこないと気が済まない。
街路樹を抜ければ繁華街がある。
そんな風に街に向かって歩いていると前方に黒い学ランの団体が固まっていた。
他所の低俗な公立高校の奴らだ。
よく分からないが輪になって道を塞いでやがる。
邪魔だと思ったが幸い人が通れるスペースがある。
まあいいかと通り過ぎようとした瞬間、その中の一人が突然、飛び出してきた。

ドンという衝撃と共に俺の肩にそいつが当たる。
次の瞬間、何かが弾けたように爆発。
とっさにぶつかってきた奴に殴りかかる。
そうなるのを待っていたかのようにキレていた。
揉め事に気づいた奴らの仲間が慌てて参戦。
不思議なことにその時、女の悲鳴が聞こえた気がした。
5～6人居ただろうが覚えていない。
とにかく今までの憂さをどうにかしたかった。
殴る、蹴るの乱闘で人数が多かったのにも関わらず、場数をこなしている俺の方が優勢。

「こら～！！　何をしている！？」

遠くから笛を鳴らしながら怒鳴り散らしている男の声が響いてくる。

「やべぇ、サツだ」

奴らの一人が叫び、慌てて逃げ出す。
もちろん、俺も。
これ以上、ムシャクシャの原因となった奴らと関わりたくない。
ただ走って走って雑居ビルとビルの間に逃げこんだ。

「はぁ、はぁ、はぁ…」

全力疾走で息が切れ、両膝に手を当てながら呼吸を整えていると、目の前にすっ…とハンカチが現れた。
見れば同じ学校の制服の女。

「血、出てる…」

そう言うと俺の唇にハンカチを押し当てた。
――何だ、コイツ？
不審に思いながら睨みつけ、ハンカチを払う。
弾かれたハンカチは地面へと叩きつけられた。
「あっ…」
女は慌てて拾うと俺の方へと向き直した。
「あのね。ただ、お礼が言いたかったの」
長い髪を2つに束ねた女は真剣な顔。
「は？」
何言ってるんだ、コイツ？
ますます不審に思い、無視しようと顔を逸らした。
「絡まれてるところを助けてくれてありがとう」
意外な言葉に驚く。
「助けた、だと…？」
思わず声に出す。
「そう、助けてくれたの。あなたが私を助けてくれたの」

訳が分からず、黙って女の話に耳を傾ける。

「急に絡まれて通り過ぎる人に助けを求めても知らん振りされてて…。必死で抵抗していたんだけど周りを固められて困っていたの。そこに現れて助けてくれたのよ」

どうやら女を囲んでた奴らが勢い余って飛び出してきて、その瞬間に俺とぶつかったんだな。

それが偶然にも助ける形となったらしい。

「あれは助けたわけじゃない」

吐き捨てるように言葉を投げる。

「ただ、俺にぶつかってきた奴に頭にきたんだ！」

俺の罵倒で一瞬、女の顔が固まる。

すぐに違うと首を振り、意を決したかのようにはっきりと告げる。

「暴力は良くないけど、結果、私は助けられたの。”橘川弘樹”に助けられたの！！」

「……！」

何でオレの名前を知ってるんだ？

「…とにかく助けてくれてありがとう。遅くなると家族が心配するからごめんなさい。また改めてきちんとお礼するね」

怯んでる隙に女は腕時計を見ながら慌てたように路地から消えた。

…よく考えると同じ学校の制服だし、俺が悪評高いので有名だからな。

空を見上げるとすっかり日が落ちたがまだうっすらと明るかった。

確実に日が長くなってるんだと感じる。

「変な女…」

そう呟くと俺は誰も居ない家に足を向けていた。

幻のランチタイム

翌日、当たり前のように登校した。
可笑しなことに普段通ってる時より早い時間に学校にいる俺。
遅刻やサボり、早退は常連。
そのツケが春休みに回ってきた…て訳だ。
朝、職員室で担任に課題をもらい、教室で解く。
夕方、担任が声を掛けてくるまでとにかくやるしかねえ。
今回で2回目となる補講もパワーアップしやがって課題数も倍。
俺に面と向かって言えない各教科連中はここぞとばかりに復讐か？
とにかく時間をフルに使わねえとこなせない状況だ。
こんなことやらねえと言ってしまえばそれまでだが、教師らと顔を合わせないならこっちの方がマシ。
ただ学校に来て課題をやればいいんだからな。
とにかく昨日と同様、教室で一人、課題を進めていた。
そんな調子で2時間を経つ頃には腕がおかしくなってくる。
何せ漢字の書き取りを1日1000字だとか、英語の辞書のアルファベットAの単語を全部書き出せとか、歴史の年表を作れだので書くことばっかを強要される。
数学や化学は頭を使う計算式ばかりで解けないからこっちを優先してるだけってヤツでさすがの俺も腕が痛くなる。
休む時間も無いからただやってるが当然ペースは落ち気味。
字はヘロヘロで苛立ちと歯がゆさの中、痛みは増してきやがる。
そんな状態の中、そろそろ昼になろうとしていた。
突然、教室の後方で戸が開く音が響き渡った。
ガラッ…という音を耳にしたがそっちを見る余裕が無い。
ふと近くに誰かが近寄る気配。
何だ…？　と振り返えれば女が居た。
昨日会った髪を2つに束ねた制服のあの女が…！

「何だよ、お前…？」

驚きながら睨みつける。

「もうすぐお昼でしょ？　休憩よ、休憩」

女は後ろに隠していたものを差し出し、にっこりと笑った。
手には弁当袋と水筒がぶら下がっていた。

「あ…？」

呆気に取られていると女は近くの机を移動させ、弁当を広げ始めていた。

「クスクス。やだ。昨日言ってたお礼よ、お礼。…はい」

言いながら水筒のお茶を注いだカップを差し出す。

「お昼になったし、御飯食べよう、ね？」

正面の時計を確認している隙に強引に箸を握らされる。
女もいただきますと呟いた後、パクパクと並べた弁当を食べ始めた。

「…あっ、そういえば、味の保証はしないから…」

女は食べながら箸の進まない俺にそう言い放つ。
呆然としたまま、現状を傍観。
目の前で起こっている出来事に何が何だか分からなかった。

片手にお茶、片手に箸を握らされた状態で向かい合わせで女が飯を食っている。

「早く食べないと休む時間が無くなっちゃうよ？」

その言葉で我に返り、掛時計を見ると5分は経過していた。
ホントのところ昼に学食へ行くのは結構大変だった。
実際は移動して飯を食うだけに費やされ、ゆっくりと休憩という休憩はとれない。
それなのに今は目の前に飯がある。これを食うのに15分もかからない。
残りの時間はゆっくり休めるという計算になる。

「お礼なんだから食べてよね！」

ほぼ強引に女は俺の口におにぎりを押し込んでくる。
止めろと怒鳴ろうとしたが口が塞がっていたのもあるし、それより何より口に含んだおにぎりのせいだ。
何だ、これ。懐かしいような…？
それから夢中で飯を頬張っていた。女も負けじと食う。
あっという間に完食。自分でも信じられない行動力。

「良かった。不味くはなかったみたいね」

女はイソイソと空になった弁当箱を片付けた。

「それじゃぁ…ね。私、昼から部活なの…」

用事を済ませたといった感じで女は教室を抜け出した。
俺は今の出来事が夢か幻ではないかと感じた。

そんな風に思える一瞬の出来事でぼんやりとしたまま過ごした残り時間を終えた。

真昼の名の夢？

今の俺には土日なんて存在しない。
とにかく補講の日々…だ。
学校側も進級が係っている名目で春休み返上して補講を決行してるとか。
とはいえ、俺一人ということもあり、担任らは交代で出勤だとよ。
まあ、部活は土日関係なく行なわれてるから学校には誰もいないって事はない。
去年も同じ経験をしたが毎度のことながら教室棟は閑散として静まり返っている。
朝から夕方までたった一人で過ごす教室。
サジを投げてる教師らは途中で見回りなど来ない。
ただ黙々と課題を行い、書き込む音だけが響く。
放置状態だがその場に閉じ込められている。
その様子はまるで監禁されているようだ。

時計の針が１２時を指す。
週末はさすがに学食の方が開いてないから今日は持参。
朝、コンビニで買った弁当を取り出した。
みずぼらしい内容のおかずを見て、ふと昨日の出来事が過ぎる。
お礼と言って弁当を持って現れたあの女。
突然やってきて風のように消えた変なヤツ。
コンビニ弁当を食べてる今から考えると信じられない時間。
夢だったのか？　とフッと笑いが込み上げてきた。
そして我に返り、わびしい弁当をかき込んだ。
その時だった。
勢いよく後方の戸が開き、バタバタと足音が響いた。
振り返ると慌てた様子のあの女が、居た…。

「はぁ、はぁ…。おっ、遅れて…ゴメン」
呼吸を整えながらゆっくりと俺の方へと近づく。
「生徒会の方が長引いちゃって…」
聞いてもないのに申し訳なさそうに女が言う。
そして昨日と同じように素早く持参弁当を用意すると食べるように勧めてきた。
俺は何も言えず、目の前の光景をあんぐりと見ているだけだった。
何て言うか、鳩が豆鉄砲食らう…、そんなところか？
「やだ。昨日でお礼が済んだって思わないでよね？」
女は真っ直ぐな瞳で訴えた。
「何なんだ、お前は一体？」
そう聞くと女は驚いたような顔で言った。
「えっ…？　私のこと、見たこと無い？」
「知るわけねぇだろ」
「ふーん、そっか…」
女は少し悲しそうな顔で俯いたが、すぐに俺を見つめ、
「私、森谷知夏。同じ学年で生徒会の書記とコーラス部の副部長や

ってるの。で、義理と人情には厚い女でしっかりとお礼させていただきます。男の子だからまだ食べれるでしょ？　味は別としてね」

言いながら空になったコンビニ弁当をどけ、持参の弁当をドンと俺の目の前に置く。

「お前、勘違いしてねぇか？」

「勘違いじゃない！　私が助けられたって言ってんだから助けられたの。でもって恩を返さないと私の気がすまないの！　いい？　分かった？」

声を荒げて興奮のあまり立ち上がって念を押す強さにただ驚いた。長い髪を2つに束ね、ピシッとした制服を身にまとっていて、見た目は清楚で大人しそうなお嬢って感じなのに…な。

憤慨した様子で食べ出すのを見て、俺もとりあえず食った。味気ないコンビニ弁当だけじゃ物足りなかったのも確かだが、昨日の懐かしい感触を味わいたかったからだ。

あっという間に食べ終わると素早く片付け、部活があるからとさっさと出て行った。

変な女。森谷知夏―――。

が、俺にとってかけがいのない女になるとは、この時は知る由もなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3892ba/

人魚姫の王子

2012年1月10日01時55分発行